



# 日本統計学会 会報 2020.10.30 No. 185

発行—— 一般社団法人 日本統計学会  
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-6 能楽書林ビル5F  
公益財団法人 統計情報研究開発センター内 日本統計学会事務局  
Tel & Fax : 03-3234-7738  
編集責任—— 山下 智志 (理事長) / 伊藤 伸介 (庶務理事)  
小池 祐太 (広報理事) / 明石 郁哉 (広報委員)  
鎌谷 研吾 (広報委員)  
振替口座—00110-3-743886  
銀行口座—みずほ銀行九段支店普通 1466879番

JAPAN STATISTICAL SOCIETY NEWS

## 目次

- |                           |   |
|---------------------------|---|
| 1. 巻頭随筆：令和二年夏……………大屋幸輔… 1 | ……………中島上智… 9                                      |
| 2. 統計学会各賞受賞者のことば          |   |
| 2.1 第25回日本統計学会賞 ……岩崎 学… 3 |   |
| 2.2 第16回日本統計学会統計活動賞       |   |
| ……………南 和宏… 4              |   |
| ……………高部 勲… 5              |   |
| 2.3 第16回日本統計学会統計教育賞       |   |
| ……………渡部靖司… 6              |   |
| ……………野藤明仁… 7              |   |
| 2.4 第14回日本統計学会研究業績賞       |   |
| ……………鎌谷研吾… 7              |   |
| 2.5 第34回小川研究奨励賞 ……澤 正憲… 8 |   |
|                           | 3. 第3回細谷賞の公募……………照井伸彦… 10                         |
|                           | 4. 理事会・委員会報告（2020年7月11日開催）… 11                    |
|                           | 5. 2020年役員・代議員協議会記録                               |
|                           | ……………加藤昇吾・伊藤伸介… 12                                |
|                           | 6. 刈屋他人次郎は Probability の「確率」訳出者                   |
|                           | という仮説……………刈屋武昭… 13                                |
|                           | 7. 博士論文・修士論文の紹介…………… 14                           |
|                           | 8. JSS Research Series in Statistics からの新刊情報 … 15 |
|                           | 9. 学会事務局から…………… 15                                |
|                           | 10. 投稿のお願い…………… 16                                |

## 1. 令和二年夏

大屋 幸輔（大阪大学）

新型コロナ感染症（COVID-19）の流行により、これまでの生活が大きく変わってしまった方々も多いのではないかと思います。この禍事に関わらざるをえなかった皆様に対し、謹んでお見舞い申し上げます。また2020年度統計関連学会連合大会の開催にご尽力いただいた方々には、大会の構成学会の会員の一人として深くお礼申し上げます。富山での現地開催の可能性を残しつつ、オンライン開催の準備など、そのご苦勞は計り知れません。以前に連合大会開催に関わらせていただいたものとしては、大会ホームページ上のお知らせのリンク先にあった「大きなトラブルなく終了することができました」の文字に安堵しております。

およそ100年前のいわゆるスペイン風邪の流行

時の対応とその後の経済状況の関係について、米国の研究者たちによって発表された論文に目を通そうとしていた頃、大学の講義はすべてオンラインで行う方針となり、慌ただしい日々を送るうちに、その論文のことはすっかりどこかに行ってしまった。暑かった夏を終え、新学期を迎えようとしている今、自粛を余儀なくされていた経済活動も徐々に再開され、新型コロナウィルス感染症の状況も小康状態を保ちつつあるようにも思われます。この間、各国の研究者たちにより、この感染症に関わる様々なことが明らかになってきている一方で、人々の行動制限、経済活動自粛などの公衆衛生対策が経済にどのような影響を与えたのか、さらにはどのような形で経済活動を再開す

るべきか、あるいはするべきではないのかなど、様々な議論が続いています。教科書的に言えば、そのような判断は何らかの合理的根拠に基づいて行われるべきであり、さらにその合理的根拠とは、データに基づくものである、となります。経済学の分野では、以前より EBPM (Evidence Based Policy Making) の重要性は謳われていました(会報 No.146の巻頭随筆で市村先生 (University of Arizona・東京大学) が経済学の領域での EBPM を支える研究分野であるミクロ計量経済学について述べられておられます)。しかしこの春から夏に打ち出された政策が有効に機能したのかどうかは、私たちが文字通り禍中にある現在は、未だ明らかではなく、今後の検証が待たれるところです。

翻って、スペイン風邪の流行時の対応とその後の経済状況に関しては、冒頭でふれた論文が Correia, Luck and Verner (2020), “Pandemics depress the economy, public health interventions do not: Evidence from the 1918 flu”, (SSRN: <https://ssrn.com/abstract=3561560>) として公開されています。厳しい公衆衛生対策をとった都市、緩い対策をとった都市については、短期的にはどちらも似たような経済的な落ち込みを示したが、より早期に、より踏み込んだ介入が行われた都市では、結果として経済状況が悪化したというエビデンスはなかったと結論付けられています。もちろん1918年当時の限られた統計データに基づく検証であり、ある程度限定的に受け取る必要はあるかと思えます。

それから100年あまり経った現在の統計データの整備状況はどうでしょうか。民間におけるデータ収集は企業活動の目的と合致する形で飛躍的に進んでいます。公的統計も公共財として多くの人々が利用できるように整備されてきています。経済の状況を把握する上でも重要な経済指標の一つである GDP は四半期データであり、月次ではありませんが、内閣府が、先行指数、一致指数、遅行指数として公開している景気動向指数は月次データとして誰にでも利用できます。打ち出した

政策に効果があったのかどうか、その政策が有効であるかどうかをいち早く見極めるには、月次データではなく、週次、あるいは日次データが必要であるとの声もあるかと思いますが、他方では、現状で利用できるデータにもとづいた知見が積み上げられ始めています。我が国の経済的な状況について、東京大学政策評価研究教育センターの web ページ ([www.crepe.e.u-tokyo.ac.jp](http://www.crepe.e.u-tokyo.ac.jp)) には、当該センターの方々による研究が取り上げられており、そこでは、非正規労働者の雇用と賃金に関することなど、重要な社会的な課題が浮き彫りにされています。また、米国におけるマスク着用義務化に関する研究は、社会的、文化的にも異なる人々の間に調和をもたらすには科学に基づく証拠を積み上げていく必要があると感じさせてくれます。9月21日の日本経済新聞朝刊の経済教室では、竹村先生(滋賀大学)、翌22日には佐藤先生(横浜市立大学)が、統計学と感染症という題目のもと、正確・迅速なデータ収集の必要性、数理モデルの有効性、PCR検査の精度、統計データにまつわる推計誤差、計測誤差について述べておられます。記述統計、推測統計に対する正しい理解とともに、データの重要性が社会の共通認識となることは、一昔前には想像がつかないほど社会から大きな期待を寄せられている統計学にとって欠くべからざることだと思います。

現在、我々が直面している困難に、あらゆる領域の研究者がその領域の壁を飛び越え、一丸となって立ち向かう必要があることは言うまでもありませんが、それはまさに、統計学、データサイエンスに関わる皆さんの力が必要とされているということでもあります。社会的困難に打ち勝つには、研究のみならず、次世代の人材育成も私たちの重要な責務だと思います。現在の私たちの研究、教育活動を、100年後の人々がどのように評価してくれるのか、知る術はありませんが、私たちが向かう先が決して間違ったものではないことを信じたいものです。

## 2. 統計学会各賞受賞者のことば

2020年9月11日、統計関連学会連合大会において、日本統計学会各賞の表彰式がありました。ここに、受賞者のみなさまから、受賞のことばをいただきましたので、以下の順にご紹介させていただきます。

- ・第25回日本統計学会賞：岩崎学氏
- ・第16回日本統計学会統計活動賞：南和宏氏，高部 勲氏
- ・第16回日本統計学会統計教育賞：渡部靖司氏，青森県企画政策部
- ・第14回日本統計学会研究業績賞：鎌谷研吾氏
- ・第34回小川研究奨励賞：澤正憲氏，中島上智氏

### 2.1 第25回日本統計学会賞

#### 受賞のことば

岩崎 学（横浜市立大学・統計数理研究所）



今回で第25回という silver jubilee の年に日本統計学会賞を受賞することとなり、推薦者および選考委員の皆さんをはじめとする関係各位に感謝申し上げます。第1回の学会賞受賞者の赤池弘次，田口玄

一，永山貞則の各先生方以来の各受賞者の中に加えていただけたということで，大変光栄に存じます。今年は新型コロナの影響で，連合大会がオンライン開催となり，直接表彰状をいただけなかったのは残念ではありますが，逆に記憶に残る受賞となりました。

学会賞受賞の記念講演もオンラインで，直接皆さんの顔が見えず反応が分からないという環境で，私のいつもの講演と同じく話があちこちに飛ぶ脈絡のないもので楽しんでいただけたかどうかはちょっと定かではないのですが，何とか無事に終えることができました。

日本統計学会に入会以来，早いもので40年が経

ちました。東京理科大学の大学院修士課程の修了後，茨城大学，防衛大学校，成蹊大学，そして現在の横浜市立大学及び統計数理研究所と職を変え，統計学の研究と教育に携わってきて，日々の「しなくてはいけないこと」に追われ，あまり過去を振り返る余裕がありませんでしたが，今回の受賞を機に，講演および執筆の準備もあって多少これまでを振り返ってみました。

一つ大きな節目となったのが1992年夏の Harvard 大学の Department of Statistics への訪問で，初めて参加した Boston での Joint Statistical Meetings (JSM) の後に訪れたものでした。当時私は40歳で防衛大学校の助教授を務めていて，翌年の1993年4月に成蹊大学に異動するというタイミングでした。Harvard 大学での滞在はたった2週間でしたが，今になって振り返ると，その後の自分のキャリアには極めて大きな影響を与えた出来事でした。統計的因果推論的に言えば反事実 (counterfactual) となりますが，この訪問がなければ，今回の統計学会賞受賞もなかったかもしれないとも思いました。

Harvard への訪問は，前年に一橋大学の皆さんの招きで日本を訪れた折にお会いした Herman Chernoff 教授に（無謀にも）手紙を書いて滞在を許可していただいたのものでした。当時の Department of Statistics には，Chernoff 教授をはじめ，A.P. Dempster，C.N. Morris，D.B. Rubin という統計研究者であれば誰もが知っている world famous な4教授がおられることは存じ上げていましたが，向こうに行って聞いたところ full professor はその4名だけであることにまず驚きました。ふつうは，有名教授以外にもそこまで有名ではない教授がいるものですが……

Harvard への訪問で得たものはいくつかありましたが，そのうちの一つは Donald Rubin 教授と知り合えたことでした。当時私は missing data に

関心を持ち始めたところで、Little and Rubin (1987)の本は知っていましたので、その著者のRubin教授の知己を得たことは望外の喜びでした。その後Rubin教授を日本に招いてセミナーを開催したり学会講演をお願いしたりし、それ以外にも米国でのJSMの機会にお目にかかったりもしました。直近では、2018年に大阪大学の鈴木譲先生のお世話で、Rubin教授には横浜市立大学に来ていただいてセミナーを行い、その後関係者を交えて横浜中華街で楽しいひと時を持つことができました。

Harvardで得たもののもう一つは「個人として付き合う」ことの重要性でした。これは当然のように思えますが、そうではありません。日本にいると〇〇大学の誰それや、△△省の何とかみたい、に、肩書がどうしてもものをいったりします。しかしHarvardから見ると、〇〇大学は偏差値がこの程度で、みたいな話は一切関係がなくなります。先に述べたようにそのときの私は防衛大学の助教授で、肩書だけから言えばHarvardの超有名教授とは全く釣り合いの取れないものでした。しかしそんなことは一切関係なく、Rubin教授とは打ち解けていろいろな話をし、その後も折に触れて交流することになりました。

交流は直流ではなく give and take です。Giveできるものをさらに蓄積したいと今でも思います。コロナの時代となり、人と人との交流に制限がかり、ややもすると気力が萎えそうですが、気を取り直して、今回の受賞を機にさらに前進していきたいと思えます。どうも有難うございました。

## 2.2 第16回日本統計学会統計活動賞 受賞のことは

### 南 和宏 (公的統計マイクロデータ 研究コンソーシアム)



この度、公的統計マイクロデータ研究コンソーシアムが日本統計学会統計活動賞という名誉ある賞をいただき、大変光栄に存じます。今回の受賞は、このコンソ

ーシアムの設立以来、その運営に携わった委員の方々、コンソーシアムの活動をご支援いただいた官の組織の方々、そして公的統計の利活用を实践される会員の方々のご尽力によるものです。本コンソーシアムを代表してお礼を申し上げます。

このコンソーシアムは公的統計マイクロデータの研究利用(二次的)を学官産が一体となって推進するために2016年に設立されました。コンソーシアムの組織は、公的統計に関する有識者12名で構成される評議会(議長:情報・システム研究機構 藤井良一)を顧問機関とし、学官のメンバー8名で構成される運営委員会が実働を担当しています。現在の会員は73名であり、公的統計の研究者を中心に、マイクロデータの分析を行うオンサイト施設の運営者、公的統計の提供に携わる官のメンバーが参加しています。

現在の主な活動は2019年に本格稼働を開始したオンサイト利用によるマイクロデータの研究利用を普及させることであり、そのためにシンポジウム及び研究集会の開催等の普及・啓発活動を定期的に行っています。さらにマイクロデータの利用者である学とデータの提供者側である官の緊密な連携を可能にするための体制の整備に取り組んできました。このような地道な普及活動は、オンサイト施設の利用者の順調な増加に貢献しており、今回の受賞でも評価いただいたと考えています。

このコンソーシアムの特徴は、我が国の公的統計に関する重要なステークホルダーと緊密に連携している点にあります。公的マイクロデータの提供側である総務省の政策統括官、統計局、(独)統計センター、そして今回統計活動賞を同時受賞した統計データ利活用センターといった官の組織と連携しながら普及活動を行い、コンソーシアム会員との間に意見交換の場の提供に取り組んでいます。また公的マイクロデータの研究利用に関する技術的課題に取り組むため、コンソーシアム会員が主要メンバーとして、科学研究費補助金基盤研究A「政府統計マイクロデータの構造化と研究利用プラットフォームの形成」(研究代表者:椿広計 統計数理研究所)に参画しています。この研究プロ

プロジェクトでは、公的マイクロデータの研究利用を推進に重要な、マイクロデータの構造化技術、秘匿処理技術、研究利用プラットフォームの基盤形成に関する基礎研究を行っています。

現在、オンサイト利用が本格稼働してから1年が経過し、オンサイト施設も11機関に拡充されるなど、マイクロデータの利用環境は着実に整備されています。一方、行政記録情報等の政府データも利用可能な欧米の一部の国と比較すると、我が国の公的統計マイクロデータは質・量ともに十分とは言えず、世界的に競争力のある最先端の学術研究を行うにはさらなる改善が望まれます。その実現にはデータ利用者の具体的なニーズを提供者側に伝える必要があり、今後コンソーシアムでは、データ利用者である会員の意見を集約し、データ提供者である官に対してユーザーの要望・提言を伝える意見交換の場の整備に取り組む予定です。

今後とも関係各位のご協力、ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくごお願い申し上げます。

## 受賞のことば

### 高部 勲(総務省統計データ 利活用センター長)



このたびは、日本統計学会統計活動賞という荣誉ある賞をいただき、心より感謝申し上げます。統計活動賞への御推薦をいただいた方々、選考の手続きに携わっていただいた方々に、厚くお礼申し上げます。

また、今回の受賞については、統計データ利活用センターの運営や共同研究等の取組等に御協力をいただいている和歌山県、地方公共団体、学術機関等の御協力によるところも大きく、この場を借りて、お礼を申し上げます。この受賞のことばに関しては、統計データ利活用センターを代表して私が書かせていただいておりますが、統計データ利活用センターの職員のほか、総務省統計局・独立行政法人統計センターの関係者がこれまでに取り組んできた、公的統計マイクロデータの利

活用に関する様々な成果について評価をいただいたものと考えております。

今回の受賞の理由として、公的統計マイクロデータの利活用推進及びそのオンサイト利用の普及促進に向けた活動が挙げられておりますが、これらは、私ども統計データ利活用センターが、業務の主要な柱として掲げているものです。また今回、日頃から連携・協力をさせていただいている公的統計マイクロデータ研究コンソーシアムも統計活動賞を受賞したと伺っており、こうした一連の受賞が、今後の公的統計マイクロデータの利活用の一層の促進に向けた大きな励みになるものと考えております。

統計データ利活用センターは、先進的なデータ利活用の拠点をコンセプトに、平成30年に和歌山県和歌山市に開設されました。そして、これまでに、和歌山県とも協力して、公的統計を含む様々なデータの利活用を通じて地方創生に貢献すべく、活動してまいりました。統計データ利活用センターでは、(1) 公的統計マイクロデータの提供、(2) データサイエンス・EBPMに資する統計データ利活用推進・支援、及び(3) 統計データ利活用に関する人材育成を事業の3つの柱として掲げており、特に、公的統計マイクロデータの提供については、これまでに、関係する機関・団体等とも協力・連携し、以下のような取組を行ってまいりました。

- ・統計データ利活用センターを拠点に、ICTを活用し、情報セキュリティを確保しつつ公的統計マイクロデータを用いた高度なデータ解析を可能とするオンサイト施設の全国展開や、オンサイト利用の利便性向上に関する取組の実施
- ・地方公共団体や大学・研究機関等と連携し、公的統計マイクロデータ及びオンサイト施設を活用した共同研究プロジェクトの推進、公的統計マイクロデータや地方公共団体が保有するデータを活用した地域課題の解決に関する取組の実施
- ・公的統計マイクロデータの利用者の利便性向上を図るために、公的統計マイクロデータの活用に関するポータルサイト「miripo」(<https://www.>

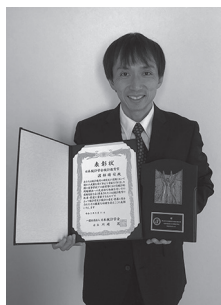
e-stat.go.jp/microdata/) を構築し、利用可能なデータ、利用手続きの詳細、各種のパンフレット・解説資料・動画、利用実績等に関する情報等を提供

また今後、公的統計マイクロデータの利活用に関する調査研究の実施、利用者ニーズの把握等の取組を進めていく予定です。

こうした取組も含め、今後も、公的統計マイクロデータを含む様々な統計データの利活用を通じて関係機関との連携を深め、社会経済の発展や地域課題の解決に貢献すべく、統計データの一層の利活用推進に向けた活動を進めていく予定です。引き続き、皆様の御協力・御支援を、よろしくお願い申し上げます。

### 2.3 第16回日本統計学会統計教育賞 受賞のことは

渡部 靖司（愛媛県立松山南高等学校）



この度は、名誉ある「第16回日本統計学会統計教育賞」を授与していただき、誠にありがとうございます。今回の受賞は、生徒が一生懸命、統計課題研究に取り組んだことや、支えてくださった多くの先生方のおかげであります。この場をお

借りしまして心よりお礼申し上げます。

私と統計学の出会いは、広島大学理学部数学科在学中に友人の滋賀大学姫野哲人先生とともに、藤越康祝先生の研究室に所属したことです。姫野先生には、当時から今日まで様々な所で支えてもらっております。私は大学卒業後、愛媛県の高校教員として教壇に立ち、統計学については、現学習指導要領で数学Ⅰ「データの分析」が導入されてから、授業で教える程度でした。

大きな転機となったのは、スーパーサイエンスハイスクール（SSH）に指定されている松山南高等学校に赴任したことです。その年に、中国・四国算数・数学教育研究（高松）大会に発表者とし

て参加し、香川県立観音寺第一高等学校の生徒のステージ発表と慶應義塾大学大学院渡辺美智子先生のご講演を傾聴し、統計課題研究に魅力を感じました。SSH第4期の指定では、理数科だけでなく、普通科も含めて全校体制で課題研究を実施することとなり、統計課題研究を行いました。滋賀大学データサイエンス学部が新設されることでしたので、姫野先生に連絡を取り、生徒対象に本校で講演をいただきました。統計課題研究を行う中で、いよぎん地域経済研究センター（IRC）を訪問し、中川様や各分野の専門研究員の方々には継続してご支援をいただいております。その結果、生徒の研究の質が高まり、各コンテストで入賞することができました。「第68回全国統計大会」の「統計データ分析コンペティション授賞式」で椿先生とお話しさせていただいたり、「地方創生☆政策アイデアコンテスト2018」の交流会で渡辺先生とお話しさせていただいたりしました。これらの経験から、私の中で統計課題研究の方向性や基礎が固まってきました。また、(株) True Data とは、「地方創生☆政策アイデアコンテスト2018」で「True Data 賞」を受賞したことが御縁で、会社を訪問したり、メールで連絡を取り合ったりして交流が続いています。昨年度は本校で「ウレコン」を使って購買データを分析するワークショップを開催していただきました。その後、True Data 本社と本校を Skype で繋ぎ、True Data の有料ツール「Dolphin Eye」を使って購買データを分析するワークショップを実施しました。また、本校生徒が「Dolphin Eye」を用いて課題研究を行い、発表会を True Data 本社と本校を Zoom で繋ぎ行いました。これらの取組を統計教育の方法論ワークショップなどで発表する機会をいただいたことが、今回の受賞に繋がりました。

今後は、企業や大学などの外部機関と連携をさらに進め、データから地域の課題を把握し、統計的に解決・提案するような統計課題研究の指導を行っていくとともに、新しい価値を創生するために必要な幅広い視野や多角的なものの考え方や論理的思考力を養い、文系・理系の枠を超えたデー

タ利活用人材を育成する取組を全校体制で進めてまいりたいと考えております。

最後になりましたが、これまで多くの方々や生徒に出会い、学ばせていただき、支えられ、今回受賞できましたことに改めて心より感謝申し上げますとともに、今回の受賞に恥じないよう、精進してまいりたいと考えておりますので、今後ご指導ご鞭撻のほど心よりお願い申し上げます。また、このような機会を準備していただいた日本統計学会の委員の先生方を始め、関係の先生方に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

#### 受賞のことは

**野藤 明仁（青森県企画政策部統計分析課）**

この度は日本統計学会統計教育賞という名誉ある賞をいただき、誠にありがとうございます。実践女子大学竹内光悦先生をはじめ、推薦していただいた先生方、また、統計指導者講習会等の統計教育支援活動に多大な御助言等をいただいた慶応義塾大学渡辺美智子先生に深く感謝申し上げます。

青森県企画政策部統計分析課では、統計調査の実施の外、統計の普及啓発にも取り組んでおり、その一環として統計グラフコンクールの開催や統計の出前授業等の統計教育支援活動を行っています。その中で最も特徴的な取組みは、主に中学校の数学の教師を対象とした「青森県統計教育セミナー」の開催で、これは平成25年度から7年間にわたって継続して行っています（本年度は新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響から中止）。

そもそも、この事業を始めたきっかけは、平成24年に統計の出前授業の要望を聞きに県教育委員会の指導主事に相談したところ、「学校現場では、統計の出前授業の要望は少ない。それよりも、平成23年度から段階的に実施される学習指導要領で統計分野が30年ぶりに拡充されたが、若い教師は統計について十分に学んでこなかったため、現在教える立場になってどのように授業を進めてよいか不安に感じている。だから、そのような教師に対して実践的な内容の講習会をやれば喜ばれる。」とのアドバイスでした。統計教育セミナー開催に

当たって一番懸念されたのは、参加者をどのように確保するかという問題でしたが、教育委員会のアドバイスにより、本セミナーを中学校の教育研究会数学部会の研修会という位置づけにしていたいただき、毎年、数学部会の年間研修計画のプログラムに組み込んでいただき、毎回100名前後の教師等に参加いただいています。

本県の取組は、全国の都道府県でも先進的な事例として注目され、この事業は平成27年度からは、総務省が予算化して推奨しており、全国6ブロックで毎年1回「統計指導者講習会」として他県でも行われるようになっていきます。昨年度は本県を含めて9府県が「統計指導者講習会」を開催しており、本県の取組がきっかけとなって、全国各地の教員の指導能力向上に貢献できたのではないかと考えています。本県では、北海道・東北ブロックを代表して、今後も「青森県統計教育セミナー」を続けていく予定です。このセミナーをきっかけに、多くの教師に統計の重要性を理解してもらい、その授業を受けた生徒たちが統計に興味を持ってくれて、現代社会で生きるための統計リテラシーをもった世代に育ってくれることを期待しています。

最後になりますが、本県の大きな政策目標として、人財育成があります。特に、未来を担う子どもたちには「生きる力」を持って自立した人財として成長してほしいと願っていますので、県としては、これからも統計的な問題解決能力を持った子供の育成に繋がるように、統計の教育支援活動は継続して取り組んでいきたいと考えています。

#### 2.4 第14回日本統計学会研究業績賞

##### 受賞のことは

**鎌谷 研吾（大阪大学）**

この度、日本統計学会研究業績賞を授けてくださり、まことに光栄です。推薦していただいた方々、選考委員会委員の方々、学会理事の方々に感謝いたします。とくに本年度はコロナウイルス感染症の影響で、例年以上の難しさがあったものと思います。関係の皆様へ感謝いたします。



受賞理由の一つは、裾の重い確率分布に対するマルコフ連鎖モンテカルロ法の研究でした。統計学におけるマルコフ連鎖モンテカルロ法は大変複雑なマルコフ連鎖を使います。理論的解析をする際は、この複雑性を回避するため、実情から乖離した仮定を置いて理論を繰り広げることも少なくありません。裾の重い分布の研究は、より現実的な仮定として、正規近似できない複雑な確率分布のひとつとして考えたものです。

裾の重い分布に対し、Roberts, Gelman and Gilks (1997) 流の高次元漸近論をあたえた研究 (Kamatani 2018) では、当時注目を集めていた、Ornstein-Uhlenbeck (OU) 過程をもとにした、Preconditioned Crank-Nicolson 法が、チューニングパラメータの選択に極めて繊細であり、頑健性を持たないことを示しました。この事実は数値実験で容易に確かめられますが、意外にもそうした理論的研究はありませんでした。改善法として、OU 過程の代わりにジャンプ型の確率微分方程式を利用した手法を検討し、九州大の増田弘毅教授に相談しましたが、これはうまくいかないだろうということがわかりました。その代わりとして OU 過程のパラメータに事前分布を入れたギブスサンプリングを考えて、これが数値計算でうまくいきました。理論的解析は私には技術的な困難がありました。マリヤン解析やスタインの技術を使えば、簡単に解決できることがわかり、なんとか研究をまとめることができました。エルゴード性の解析は当初念頭にありませんでしたが、試みに計算してみたところ、驚くほど簡単に、広い範囲の確率分布に対してマルコフカーネルのスペクトルギャップの存在が言えました (Kamatani 2017)。

最近の研究は、モンテカルロ法の理論研究の中心である、ヨーロッパで学んだ研究者との共同研究です。A. Jasra 教授がふらりと大阪にやってき

たことから始まった共同研究は、6本の論文に繋がりました。P. Del Moral 教授には、その陽気な性格と研究スタイル、そして精密で質の高い研究に大変刺激を受けました。最近研究を進めている逐次確定的マルコフ過程も英国やオランダとの共同研究です。高いモチベーションを持つ研究者との共同研究は大変有意義です。

こうした共同研究は、科学研究費補助金とともに、JST CREST プロジェクト「先端的確率統計学が開く大規模従属性モデリング」でサポートされた共同研究の成果です。プロジェクトチームのリーダーである東京大学吉田朋広教授には、大学院でのご指導をはじめ、様々なサポートいただき感謝いたします。大阪大学基礎工学部のスタッフは共同研究のための長期出張や、ビジターの対応に大変好意的で、その裏ではしわ寄せとしてのご迷惑をおかけしていたことと思います。基礎工学部のスタッフ、とくに狩野裕教授や、内田雅之教授には、助教であるころから叱咤激励していただき、感謝します。

## 2.5 第34回小川研究奨励賞

### 受賞のことば

澤 正憲 (神戸大学)

この度、日本統計学会小川研究奨励賞という歴史のある賞を授与していただき、誠に光栄に存じます。平素よりご指導、ご助力を賜っております多くの方々に、この場をお借りして心より

御礼申し上げます。

私が最適計画の研究に深く関わるようになったきっかけは、A. Neumaier, J.J. Seidel による論文 Measures of strength 2e and optimal designs of degree e (Sankhya Ser. A, 1992) です。この論文は、従来凸解析の枠組みで語られることの多かった最適計画と数値解析学における cubature 公式や組合せ論における Euclidean design の等価性を示してお



り、実験計画法、数値解析学、組合せ論の3分野の本格的な越境を促したものです。それまで cubature 公式論の数学的側面にのみ注目してきた私の目には、彼等の仕事はとて新鮮で美しく映りました。程なくして、学生時代からの友人で cubature 公式道を共に歩んできた平尾将剛氏の誘いもあって、師である神保雅一先生にアドバイザーをお願いして、最適計画の構成法に関する研究(勉強会)が始まりました(2012年頃)。当時の私には統計学の素養が絶対的に不足しており、お二方にはご迷惑をおかけしてばかりでした。しかし、この期間に最適計画の研究分野で自身の独自性を発揮するために何が必要であるかを真剣に考え、cubature 公式や最適計画の理論の古典を再生核ヒルベルト空間の理論的枠組みで再構築する Euclidean design theory の着想を得たことは、私の財産です。

当時の神保研究室は国内外から集った多くの学生と研究者で賑わっていました。研究テーマも良い意味でバラついていて、私のように組合せ構造の構成法に興味をもっていた人、その情報通信への応用研究にいそしんでいる人、統計解析に従事している人などなど、多様な興味と人々が往来するよろず屋的な研究室でした。自由闊達に研究すること、多様な思想に触れることの大切さを教えてくださったのは神保先生です。

最後に小川潤次郎先生とご家族に心より御礼申し上げます。小川先生の論文集(副賞の一つ)を拝見して、先生が、私の学部時代の師であり我が国の実験計画法の数理的側面の研究分野を牽引してこられた景山三平先生、その師である山本純恭先生と共著論文を執筆されていたことや、私の学位論文のテーマに関係する partially balanced incomplete block design の存在問題を精力的に研究されていたことなどを知り、大変驚いております。私が実験計画法に端を発する組合せ構造の研究の道を志したきっかけは景山先生との出会い(2002年頃)にあります。その景山先生に影響を与えられた小川先生がどのような方だったのか、そのようなことも想像しながら、論文集を楽

しく拝読させていただきます。

## 受賞のことば

中島 上智(日本銀行)

この度は、日本統計学会の小川研究奨励賞を賜りまして、大変光栄に存じます。選考委員会の先生方、推薦をして頂きました先生方、および、これまでご指導賜りました先生方に厚く御礼申し上げます。特に、研究者としての私を一から育ててくださった、東京大学の大森裕浩先生には深く感謝申し上げます。また、共同論文等でご指導頂いております、一橋大学の渡部敏明先生にも厚く感謝申し上げます。



Ph.D. を取得したデューク大学での勉強と研究の日々は、私にとってかけがえのない時間でした。デューク大学統計学部でお世話になった指導教官の Mike West 氏、ならびに学部の先生方や同僚たちにも感謝申し上げます。

私はこれまで、確率的ボラティリティモデルや時変パラメータ自己回帰モデル等、時系列モデルのベイズ推定法を中心に研究を行って参りました。最近では、特に、時系列モデルのデータ系列やパラメータが高次元となる場合の効率的な推定法に関する研究に注力して参りました。これまでの研究テーマの約半分が、実務の現場でひらめいたことがきっかけとなっています。勤務先の日本銀行では、これまで様々な部署に在籍して、実際のデータと格闘する中で、様々な統計モデルの開発を行って参りました。昨年までは、スイスのバーゼルにある国際決済銀行(BIS)で3年間、世界中の金融経済データを扱いながら研究を行いました。実務の現場はデータの宝庫であると同時に、新しい統計モデルの種がそこら中に散らばっている場所と感じています。

日本銀行や国際機関など、公的機関の実務の場でどういった統計モデルが使われているかは、外から見えにくいものですが、現場によっては最先

端の統計モデルを駆使している部署もあります。例えば、日本銀行の調査統計局では、Q-JEM (Quarterly Japanese Economic Model) という大型の日本経済の予測モデルを運用しており、このモデルに含まれる回帰式は数百本にのぼります。このモデルを使って、日本経済の数年先までを予測したり、海外経済に変化が起きたことを想定した場合のシミュレーションなどを行い、政策の議論に役立てています。モデルの推計の過程では、MCMC 法による推計を行ったり、Python によるアルゴリズムの高速化などを行っています。また、現在の景気の動きをいち早く、より精緻に把握するために、Dynamic factor model, Mixed frequency model 等の時系列モデルによる予測や、景気に敏感な企業からのコメントにテキスト分析を施し、

企業の声を指数化する試みなども行っています。アカデミックの世界からみても洗練された統計モデルを使うことによって、データから得られる情報のバイアスを極力減らしたうえで、推計誤差を正しく判断することにより、データに直結した正しいエビデンスに基づく政策の議論を支えています。

アカデミックの研究者と政策に携わる実務家のインタラクションは、双方の世界のフロンティアを広げていくものだと感じています。私自身、この2つの世界で二足の草鞋を履いておりますので、そうしたインタラクションが進むような流れに貢献できたらと考えております。今回の受賞を励みに、より一層、研究活動や学会活動に精進していく所存です。

### 3. 第3回細谷賞の公募

東北大学大学院経済学研究科では、細谷雄三名誉教授の統計学界における教育・研究への貢献を記念して、広く人文・社会科学分野における若手研究者のデータ科学研究を奨励するため、細谷賞を創設しました。このたび第3回細谷賞の公募を開始いたします。本賞は、東北大学須永特定基金より寄付を受け日本統計学会の後援により実施するもので、受賞者には研究奨励金(10万円)を授与します。人文・社会科学におけるデータ科学の理論および応用研究に努める多くの若手研究者の応募を期待しています。

#### 1. 応募資格

- (1) 過去3年程度以内に、国内外の学術誌に掲載された人文・社会科学分野におけるデータ科学(統計分析・計量経済分析を含む)に関連する論文(単・共著ともに可)の著者であること
- (2) 論文出版時点において40歳未満の者。

#### 照井 伸彦(東北大学大学院経済学研究科)

2. 応募期限 2021年3月31日必着

#### 3. 応募書類

(1) 申込用紙

(<http://www2.econ.tohoku.ac.jp/~DSSR/hosoya.html>)よりダウンロード)

(2) 審査対象とする論文1編

#### 4. 送付/問合せ先

応募書類をPDFファイルにまとめてEmailにて下記宛に送付のこと

[dssr-sec@grp.tohoku.ac.jp](mailto:dssr-sec@grp.tohoku.ac.jp)

〒980-8576 仙台市青葉区川内27-1

東北大学大学院経済学研究科サービス・データ科学研究センター

<http://www2.econ.tohoku.ac.jp/~DSSR/>

5. 発表の通知 2021年6月(予定)

11月(予定)に受賞者を東北大学に招待し、表彰式およびHosoya Prize Lectureを行います。

## 4. 理事会・委員会報告 (2020年7月11日開催)

### 一般社団法人 日本統計学会 理事会

日時 2020年7月11日 (土曜日)

午後1時00分～午後1時30分

場所 統計数理研究所 D508

ハイブリッド出席型バーチャル理事会として実施

Zoom (ミーティング ID: 995 4799 4630)

理事の総数 13名 出席理事の数 12名

監事の総数 3名 出席監事の数 3名

出席者:

理事: 川崎茂会長, 山下智志理事長, 加藤昇吾 (庶務), 伊藤伸介 (庶務), 青嶋誠 (JJSD), 吉羽要直 (会誌編集和文), 小池祐太 (広報), 稲葉由之 (大会・企画・行事), 松田安昌 (国際), 菅澤翔之助 (国際), 前田忠彦 (渉外), 瀬尾隆 (渉外) (以上12名, カッコ内は役割分担)

監事: 赤平昌文, 岩崎学, 中西寛子

欠席: 吉田靖 (会計)

#### 第1議案 常設委員会における委員について

山下理事長より, 資料に基づき, 常設委員会における委員について報告があり, 審議の結果, 承認された。

#### 第2議案 日本統計学会中村隆英賞の選考委員の推薦について

川崎会長より, 資料に基づき, 日本統計学会中村隆英賞の選考委員として舟岡史雄氏 (信州大学名誉教授), 山本拓氏 (一橋大学名誉教授), 會田雅人氏 ((公財) 統計情報研究開発センター専務理事) の推薦があり, 審議の結果, 承認された。

#### 第3議案 会員の入退会

山下理事長より, 資料に基づき, 入退会希望者が紹介され, 審議の結果, 承認された。

### 一般社団法人 日本統計学会 委員会

日時 2020年7月11日 (土曜日)

午後1時30分～午後3時30分

場所 統計数理研究所 D508

ハイブリッド出席型バーチャル委員会として実施

Zoom (ミーティング ID: 995 4799 4630)

理事の総数 13名 出席理事の数 12名

監事の総数 3名 出席監事の数 3名

出席者:

理事: 川崎茂会長, 山下智志理事長, 加藤昇吾 (庶務), 伊藤伸介 (庶務), 青嶋誠 (JJSD), 吉羽要直 (会誌編集和文), 小池祐太 (広報), 稲葉由之 (大会・企画・行事), 松田安昌 (国際), 菅澤翔之助 (国際), 前田忠彦 (渉外), 瀬尾隆 (渉外) (以上12名, カッコ内は役割分担)

監事: 赤平昌文, 岩崎学, 中西寛子

欠席: 吉田靖 (会計)

#### <報告事項>

##### 1. 萩生田文部科学大臣に対する統計教員人材育成事業に関する提言について

山下理事長より, 資料に基づき, 日本統計学会から萩生田文部科学大臣への統計教員人材育成事業に関する提言について報告があった。また, 今回の提言の目的および提言に至る経緯について説明があった。

##### 2. JJSD 支援委員会

青嶋委員長より, JJSD のこれまでの刊行状況と最新号の編集状況について報告があった。

##### 3. 和文誌編集委員会

吉羽委員長より, 資料に基づき, 和文誌第50巻第1号の編集状況および第50巻第2号の編集方針について報告があった。また, 第51巻第1号, 第2号の特集企画について説明があった。

##### 4. 大会委員会

稲葉委員長より, 2020年度統計関連学会連合大会の進捗状況について報告があった。

##### 5. 企画・行事委員会

稲葉委員長より, 2020年度日本統計学会春季集会の進捗状況について報告があった。

##### 6. 庶務委員会

伊藤委員長より, 以下について報告があった。

- ・役員・代議員協議会の開催について
  - ・2020年度統計関連学会連合における企画セッションについて
  - ・推薦について
- 第11回 (令和2年度) 日本学術振興会 育志賞

横幹連合コトづくりコレクション

・後援承諾について

慶應義塾大学データビジネス創造コンテスト「第11回データビジネス創造コンテスト～Digital Innovators Grand Prix 11 (DIG11)～」

#### 7. 広報委員会

小池委員長より、資料に基づき、日本統計学会会報184号の編集状況について報告があった。また、学会ウェブサイトのシステム更新を今年度7月中に行う予定と説明があった。

#### 8. 国際関係委員会

松田委員長より、日本・韓国・台湾の合同企画セッションについて報告があった。今年度6月に予定されていた台湾での合同企画セッションの中止および今後予定されている合同企画セッションの企画状況について報告がなされた。

#### 9. 渉外委員会

前田委員長より、科研費の用途に関する報告があった。講演者の招聘キャンセルおよびそれによる科研費への影響について報告がなされた。また、瀬尾委員より、統計検定の6月試験の中止および11月試験の実施の検討状況について報告があった。

#### 10. ISI 東京大会記念基金運営委員会

川崎会長より、ISI 東京大会記念基金奨励賞の来年度の募集について報告があった。35歳以下の若手研究者が募集の対象者となり、採択者は来年度のISI 国際会議の旅費が補助される旨の説明があった。また同基金は、ISI のサテライトミーティングの補助も行っていると報

告があった。

#### 11. その他

今回の日本統計学会理事会および委員会が2020年10月24日（土）に開催されることが案内された。

#### <審議事項>

##### 1. JJSD 支援委員会

特になし

##### 2. 和文誌編集委員会

特になし

##### 3. 大会委員会

特になし

##### 4. 企画・行事委員会

特になし

##### 5. 庶務委員会

特になし

##### 6. 広報委員会

小池委員長より、資料に基づき、学会関連メーリングリストのアーカイブ（過去ログ）の削除・廃止について提案があり、審議の結果、管理者の許可が取れたアーカイブについては削除・廃止することが決定した。

##### 7. 国際関係委員会

特になし

##### 8. 渉外委員会

特になし

##### 9. その他

特になし

## 5. 2020年役員・代議員協議会記録

加藤 昇吾・伊藤 伸介（日本統計学会庶務担当理事）

日時：2020年9月8日（火）

午後6時30分～午後8時10分

場所：統計数理研究所 D508

ハイブリッド出席型バーチャル協議会として実施

Zoom（ミーティングID：937 7733 1853）

参加人数44名

#### 議題

1. 理事および委員の交代について
2. 代議員選挙、会長選挙について
3. 連合大会中の日本統計学会関連セッションについて

4. 第15回春季集会について

5. 統計検定について

6. 高度統計教育者人材育成事業について

7. ISI 東京大会記念奨励賞の募集について

8. 組織特別委員会における準会員の議論に関する報告について

9. その他（質疑応答、情報提供等）

・理事会報告

・委員会報告

## 6. 刈屋他人次郎は Probability の「確率」訳出者という仮説

刈屋 武昭（名古屋商科大学 GSB 教授，一橋大学名誉教授）

2005年ごろ，首都大学東京の中塚利直氏（[1] 参照）から，「刈屋他人次郎（かりやたにんじろう）という人は，明治時代に Probability を「確率」と初めて訳出した数学者ですが，彼と親戚ですか」，という質問があった。その時は，その事実さえ知らず，無関係でしょうと答えた。しかし，人生の中で統計学や金融工学などで確率論の恩恵を糧に生きてきたことと，刈屋という姓が少ないことから，「もしかしたら」とも思い，検索してみたが，十分な情報が得られず，15年たってしまった。

2020年7月頃，コロナ問題について，退職者も多い大学同窓の友人間のネット交流が活発になっていく中で，「岩手県感染者ゼロ」を少し揶揄したことから，盛岡市居住の学友板澤正明医師（一橋卒，ポランの内科クリニック）から，その事実の裏に「医療機関を中心とした最大限の努力や，県民の「心の信号機」のもとに最大限の注意などがあること」を指摘され，反省してお詫びした。

その際，私の父は，岩手県下閉伊郡刈屋村（現在宮古市刈屋地区）の出身で，昭和8年の津波にあり，刈屋家一族は財産をほとんど失い，北海道十勝地方に移住したが，結局家族が離散したこと，そして15年前のことを思い出し，「確率という語を訳出した」刈屋他人次郎という数学者の足跡を探していて，老後の楽しみとしてこの調査をすることなどを述べた。他方，板澤医師は釜石市出身であるが，彼の家系は刈屋村の近くの場所に深い縁があるなど，互いに個人的な会話を通して，急速に「こころの距離」が接近していった。そして彼の尽力により，他人次郎の足跡が明らかになったのだ。

まず彼から「名字由来ネット」の存在を知り，刈屋姓の分布状況（約1300人，そのうち岩手県は約360人）や，私の出身地浜松の刈屋姓の分布状

況を把握した。さらに，彼から送られた，『岩手県姓氏歴史人物大辞典』（角川書店）の「刈屋姓のファイル」によると，刈屋村の刈屋姓の由来は，鎌倉時代の地頭の家臣である，と記載。また，下閉伊郡の系統には大正時代に刈屋姓の名前もあるが関係は不確定。重要な点は，刈屋他人次郎（1874-1921）の名前とその系統の当主珠明の名前を発見したこと。この家系は江戸時代の早期から南部藩の家臣とのこと。その結果，私の家系らしきものと，探していた他人次郎の系統は異なっていた。したがって，懸案の老後の楽しみは，板澤医師と，探索の支援者の学友池川靖彦と「盛岡で酒を交わすこと」に変わった。

さて，確率の訳語の件だが，中塚論文では，probability の明治・大正の訳語では「偶然率・公算・適遇・近真率」等多数が紹介されている。なお公算は確率と同じ意味。そして確率という訳語は，林鶴一・刈屋他人次郎共著『公算学（確からしさの理論）』大倉書店（明治41年10月刊）に林の名前だけを載せた序の中にある。そこでは，probability の訳を藤沢（利喜太郎）博士の訳と聞く「確からしさ」とするのは長く，「蓋然率」あるいは「確率」なる訳語も新案せらりたりと雖，通じがたきを以て終に採用することを止めたり」とある。この「止めたり」と決定したのは，林であると，読むのが自然だろう。時代背景を考慮すると，学界の空気や権威への忖度もあったと推測する。

本書では，離散確率を主としているが，砲弾射撃の確度を扱う部分では1次元正規分布を簡単に紹介。他人次郎は，最小自乗法講義（1912）など数多くの教科書を出版，その数冊は林鶴一（1873-1935）（東大学生時に高木貞治と同期，年齢では同じ東大卒の刈屋の1年先輩）との共著である。また他人次郎は幾何学で「刈屋の定理（刈屋点）」

を証明（検索可能）、陸軍大学校教授（[2]）。

一方、中塚論文からは、「確率という訳語は、大正7年ごろから数人が使い始める。しかし、前後の状況証拠からみると、保険論の専門、東大の数学者「権威」藤澤利喜太郎（1861-1933）が中心となり、藤澤セミナーを主宰（林も参加）する中で、大正10年（同年刈屋は逝去）ごろから定着させるのに貢献した」と、読める。当時の学界の他の権威の意見は [3] 参照。なお渡辺孫一郎は大正8年に「確率」論で東大学位取得、同年東大数学科に「確率及統計」課程が設置される。

このようなことを踏まえて、私は、上記の状況証拠をもとに、「岩手県数学者刈屋他人次郎」を最良する（！）次の主観的事前仮説を提案したい。

【確率の訳語を新案したのは他人次郎で、先輩林もそれを合理的と見たが、多くの権威が異なる訳語を使う中では、林は（序には書いたが）時期尚早として、様子を見た。そして林が藤澤セミナーに参加する中で、多くの領域で多様な訳語が使われ、用語統一が進まないプロバビリティーの訳語について、林が藤澤に影響を与えていった。】

まあ、歴史の中の「事実」には、人の行動のモチベーションや意図するものを確定できず、「専門家」たちの主観分布に基づくものがたくさんあ

り、その中で多様なストーリーを重ねて理解や合意をしていくことが多いと思う。多くは決定的な反証を示すことができず、あるいは時の政治的背景から受け入れていることも多い。そのような「事実」は仮説である。このような「不確定性」には、事前主観ウェイトを当てはめることはできても、その信頼性は新しい確かなデータが出てこない限り、仮説であろう。

コロナの政府の専門家による観察なき仮説はデータにより反証されているが、まだまだ未知の部分が多い。しかし、世界の科学者がその知識の不確実性を科学的に小さくしつつある。これは社会科学の不確実性と異なる点である。

[1] 中塚利直（2008）「プロバビリティーの訳語の歴史」『経営と制度』第6号

[2] 安藤洋美（2000）「我が国における明治期の確率・統計の教育について」『統計解析研究所講究録』1130巻

[3] 河野敬雄（2019）公算 vs. 確率（2） — Probability とは何を意味するのか

<https://www.math.kyoto-u.ac.jp/alumni/bulletin3/kono.pdf>

## 7. 博士論文・修士論文の紹介

最近の博士論文・修士論文を原稿到着順に紹介いたします。（1）氏名（2）学位の名称（3）取得大学（4）論文題名（5）主査または指導教員（6）取得年月の順に記載いたします。

### 博士論文

●（1）Jia-Han Shih（2）理学博士（3）国立中央大学（台湾）（4）Copula-based statistical inferences for a common mean vector and correlation ratios using bivariate data（5）江村剛志（6）2020年3月

### 修士論文

●（1）Wei-Chern Hsu（2）理学修士（3）国立

中央大学（台湾）（4）A survival tree based on stabilized univariate score tests with high dimensional covariates（5）江村剛志（6）2020年8月

●（1）Ching-Chieh Lai（2）理学修士（3）国立中央大学（台湾）（4）Change point estimation based on copula-based Markov chain model for binomial time series data（5）江村剛志（6）2020年8月

●（1）Teraiamanu Bélanger（2）修士（工学）（3）慶應義塾大学（4）Prediction of PM2.5 Concentrations and Their Effects on Human Health Using MCMC Algorithms（5）南美穂子（6）2019

年9月

● (1) 宇野大我 (2) 修士 (理学) (3) 慶應義塾大学 (4) 拡散摂動モデルの下での最適境界のセミパラメトリック推定 (5) 白石博 (6) 2020年3月

● (1) 勝山頌一郎 (2) 修士 (工学) (3) 慶應義塾大学 (4) ソーシャルメディア投稿内容のスコアリングによる株価分析 (5) 白石博 (6) 2020年3月

● (1) 竹原大翼 (2) 修士 (3) 慶應義塾大学

(4) 単語の分散表現とその階層構造 (5) 小林景 (6) 2020年3月

● (1) 童祺俊 (2) 修士 (3) 慶應義塾大学 (4) エントロピー制約付き最適輸送問題の解と性質 (5) 小林景 (6) 2020年3月

● (1) 会田晴郎 (2) 修士 (工学) (3) 慶應義塾大学 (4) シフトガンマ分布をフレイルティに用いた加速時間治療モデルの提案とその疫学研究への応用 (5) 林賢一 (6) 2020年3月

## 8. JSS Research Series in Statistics からの新刊情報

日本統計学会編の書籍シリーズ JSS Research Series in Statistics からの新刊情報を掲載します。

● Li-Hsien Sun, Xin-Wei Huang, Mohammed S. Alqawba, Jong-Min Kim, 江村剛志『Copula-Based Markov Models for Time Series: Parametric Inference and Process Control』Springer, 2020年7月, 冊子体: 49.99ユーロ

内容紹介: 系列相関 (自己相関) のある時系列データの統計解析法を解説. マルコフ連鎖のコピュラモデルによる解析に焦点を当てた書籍. 理論的

基礎 (コピュラ, 統計的推論) に加え, 実例を詳説 (品質管理, 株価, プロ野球データ).

● 大和元『Statistics Based on Dirichlet Processes and Related Topics』Springer, 2020年7月, 冊子体: 49.99ユーロ

内容紹介: ディリクレ過程を事前分布とする推定可能な母数のベイズ推定に関連する推定量を含むU-統計量の凸結合を紹介している. また, 過程に従う確率1で離散的な分布からの標本の同時分布に関わる各種の性質を与えている.

## 9. 学会事務局から

### 学会費払込のお願い

2020年度会費の請求書が会員のお手元に届いていることと思います. 会費の納入率が下がると学会会計に大きく影響いたします. 速やかな納入にご協力をお願い申し上げます. 便利な会費自動払込制度もご用意しています. 次の要領を参照の上, こちらもご活用下さい. また, クレジットカードでの学会費払込も受け付けております. お申込みは学会ホームページよりお願いいたします. (<https://www.jss.gr.jp/fee/>).

### 学会費自動払込の問合せ先

学会費自動払込問合せの旨とともに, 氏名と住所を以下にお伝えください. 手続きに必要な書類が送付されます.

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-6

能楽書林ビル5F

公益財団法人統計情報研究開発センター内  
日本統計学会担当

Tel & Fax : 03-3234-7738

E-mail : [shom@jss.gr.jp](mailto:shom@jss.gr.jp)

## 訃報

次の方が逝去されました。謹んで追悼の意を表し、御冥福をお祈り申し上げます。

白石 典義 会員

## 現在の会員数（2020年10月7日）

名誉会員	16名
正会員	1,385名
準会員	5名
学生会員	67名
総計	1,473名
賛助会員	16法人
団体会員	8団体

## 10. 投稿のお願い

統計学の発展に資するもの、会員に有益であると考えられるものなどについて原稿をお送りください。以下のような情報も歓迎いたします。

### ● 来日統計学者の紹介

訪問者の略歴、滞在期間、滞在先、世話人などをお知らせください。

### ● 博士論文・修士論文の紹介

(1) 氏名 (2) 学位の名称 (3) 取得大学 (4) 論文題名 (5) 主査または指導教員 (6) 取得年月 をお知らせください。

### ● 求人案内（教員公募など）

### ● 研究集会案内

### ● 新刊紹介

著者名、書名、出版社、税込価格、出版年月をお知らせください。紹介文を付ける場合は100字程度までとし、主観的な表現は避けてください。

### ● 会員活動紹介（叙勲・受章、各種受賞等）

できるだけ e-mail による投稿、もしくは、文書ファイル（テキスト形式）の送付をお願い致します。

### 原稿送付先：

〒153-8914 東京都目黒区駒場3-8-1

東京大学大学院数理科学研究科

小池 祐太 宛

E-mail：koho@jss.gr.jp

（統計学会広報連絡用 e-mail アドレス）

- 統計学会ホームページ URL：  
<https://www.jss.gr.jp/>
- 統計関連学会ホームページ URL：  
<http://www.jfssa.jp/>
- 統計検定ホームページ URL：  
<http://www.toukei-kentei.jp/>
- 住所変更連絡用 e-mail アドレス：  
[meibo@jss.gr.jp](mailto:meibo@jss.gr.jp)
- 広報連絡用 e-mail アドレス：  
[koho@jss.gr.jp](mailto:koho@jss.gr.jp)
- その他連絡用 e-mail アドレス：  
[shom@jss.gr.jp](mailto:shom@jss.gr.jp)